



“銭湯”が悲鳴を上げながらポツポツと消えていったのは、昭和40年代の頃から50年代初めにかけてだろうか。

景気が上向きになり、自宅の新築、改修が急テンポで進み、家に風呂のある事が当たり前になった時代を反映した社会現象なのだろう。

私も昭和51年に自宅を新築してから、殆ど“銭湯”へ行った記憶はない。

まだ小学校へ行く前に父や母に連れられて通った“銭湯”の情景が、今ふと心に浮かび遠くざわめきと共に懐かしく去来する。

その日の連れて行く人によって、男風呂の「のれん」をくぐるのか女風呂に入るのかは違って来る。小学校4~5年までは、女風呂に入っていた記憶が強いから、やはり母や妹と一緒にの方が多かったと思う。

広い脱衣所に積んである、円い竹籠に衣類を投げ捨て、風呂場に急行し、部品を洗うことなど頓着せずに、大きな浴槽に飛び込む。

風呂場の男湯と女湯は中壁で仕切られているが、高い天井まで届いていないので、子供達の声、世間話のざわめき、湯水の音が独特に反響して“銭湯”という雰囲気をかもしだしている。

洗い場が空くのを待って、一家4人が陣取り、母は嫌がる子供達の頭から背中から洗い始め、おとなしい妹達は優等生、少しも落ち着いていない私は困ったやつで逃げないように押さえつけられながらの芋洗い。最後に母は自分の体を洗って終了。「湯から上がる前はよくつかって、充分暖まってからでるんだよ」としつこく言われたが、子供の体は小さいの

ですぐ熱くなる。飛び出す子を押さえて「あと100まで数えたら出ていいよ」と算数の勉強までさせられた。

時には、昼間の過激な遊びで疲れ果て、浴槽に入っているうちに寝てしまい、そのままズボズボと沈む所を、隣のおばさんに助けてもらったこともある。

男湯では、ものすごい熱い湯に入る年寄りが出て、子供は熱くて入れないので、大きな蛇口を捻って“どうっ~”と水を出そうものなら「ぬるくするな!」と怒鳴りつけられる。でも、うるさい“ジイちゃん”が出てから、お湯はすぐぬるくなってしまった。又、芯の底から煙草が好きで「ニコチン」が体中に回っている人が居て、傍に近付くだけで、湯気と共に独特の臭いが匂ってきて、子供にはどうしてもなじめなかった。

さすが女湯には居ないが、洗い場に酔っ払いが「大」の字になって寝ている。風呂桶を箱枕のように当てがい、部品丸出しで気持ちよさそうにいびきをかいている。大人にはこんな人もいるんだなと思いつつ、珍しそうに見ていた。

ある時、助平な酔っ払いが、男湯と女湯の中壁を途中までよじ登り、女湯へ頭だけを覗かせ、老若混交の裸の満艦飾を鑑賞する事態となった。一瞬女湯が「シーン」と不気味に静かになったと思ったら、番台からすっ飛んできた風呂屋の親父が、ふらち男の裸の背中から腹側へ腕を回して引っ張ったので、たまたま男は、タイルの洗い場へどすんと落ち、首根っこを掴まえられて男湯から退散となった。今だったら「出歯カメ男」として新聞に

まで載って、拳句の果て職を失うはめになったかもしれないが、当時はこんこんと説教されておしまい。

昨今は写真週刊誌にヘアーなるものまで載せてよい時代だが、当時としてはめったに見られないものを、「出歯カメ」さんは湯気越に堪能したとすることになるのか。

でも今思い出してみると、男湯と女湯の境目には背をかかめてくぐり抜けられるほどの小さな木製の開き戸が1ヶあり、子供達は両方の湯を自由に出入りしていた。ここの開き戸から顔を出しても「カメ」さんにはなれたんだよね。

親より早く浴槽から出て、脱衣所で遊んでいるものだから、何時までたっても下着のまま。そう言えば、冬もパンツなんて履いていなかった。上と下がつなぎで、チンチンのカシヨはオープン「コンビネーション」とかいう、厚い毛布生地で作った暖かい下着を着ていたものだ。

脱衣所の境目は大きな姿見の鏡になっていて、ハーと息をかけて曇らせて、指で絵を書いて遊んだり、竹籠の中に妹を入れて、上からも一つの籠で蓋をしてとじ込めたり、脱いだり着たりしている人で、混んでいる中を鬼ごっこをして怒られたり、とにかくじっとしていなかったと記憶している。母親が妹達の世話を終えて帰れるようになるまでには、私にしてみればかなり待つことになるので、少し遅い時刻に風呂へ行った時は、待ちくたびれて床に座りながら半分寝てしまい、帰り



道は手を引かれて月夜の帰宅になることもしばしば。昼間の精一杯の遊びで腹ペコ状態から、待ちに待った夕食を食べ、それから風呂へ行くので、家に戻ったら夢の世界へ一直線となってしまう。

私が中学の頃に、古い家を改修して母が願っていた風呂を作った。

浴槽は楕円形で木製だったし、土間はモルタルでそれに木の格子箆の子を置いて洗い場としていた。夏になると少し下水の匂いがしたり、細ミミズもいたことを覚えている。まだ当時としては自家用風呂は珍しく、近所の友達を呼んでは一緒に入った。

石炭が燃料で、沸かすのに1時間以上かかり、火は仕舞い湯まで燃え続けているので循環口からは熱いお湯が何時も出ていて、数人で入る時は、沸き口をかき回しながら入っていた。

最初、石炭に火をつけるには“焚き付け”をまき割りして作らなければならなかった。勿論当時の暖房も石炭ストーブで、煙突でつながった真鍮製の「湯沸かし器」がついてワンセットとなっており、この湯を食事の煮炊きや湯たんぽに利用していた。

風呂のおかげで、冬ばかりでなく、夏も薪割をして積んでおかなければならなかった。東京での学生時代は、下宿やアパートを4回も変え、もらい風呂や銭湯通いをしていたが、1年の内4ヶ月ほどは登山をしていたので、普通の生活の記憶はあまりない。

就職してからは、現場の寮生活になり、5~6人程度入れる風呂に入っていた。

結婚してからは、現場が地下鉄工事なので夜勤が多く、朝の8時に昼勤との打合せをしてから職場の風呂に入り、家に帰り着いたらすぐ寝て、夕食を食べて夜の勤務へ出勤という生活の繰り返しが多かった。

初めて借りたアパートには、風呂がなかったので、たまの休みの時には2人で銭湯に通った。

アパートが小高い丘の上であり、下の街道沿いにある銭湯まで、洗面道具を持ちながら

ぶらぶら坂道を下った。夕方のまだ明るい中に、住宅の立ち並ぶ細い道路脇の空き地に咲く、マンジュシャゲの赤が、今でも目に焼きついている。

湯の時間が短い私に気を遣い、急いで洗いを済ませて出てきた妻と待ち合わせ、街灯のついた急な坂道を、ほてった体を気持ちの良いそよ風に送られて、ぶらりぶらりと家路につく。

普段は、私が忙しいので、妻は一人で銭湯に通い、帰り湯の道すがら、街道沿いの雑貨屋の公衆電話で、娘から遠い北海道の母に電話をして涙したのもこの頃だ。

快適な生活が送れるようになり、蛇口から簡単に湯が出るようになったご時世では、銭湯は経営できなくなったが、風呂屋ばかりではなく、78回転のレコード盤のオールディーズの時代もまた遠くに押しやれてしまったようだ。

ゆったりとした時間の中で、心に刻みつけられるものの意味を、時代は葬り去ろうとしているのではないだろうか。

子供や年寄りが必ずいてなごやかだった隣近所とのつき合い、親の無体なカミナリでも子供は絶対服従、やさしく慰めてくれる年寄り、遊びに行けば必ず歓待してくれる友達の母親、放し飼いの隣の犬はみんなが飼い主、石の下をほじくって餌のミミズとり、遠い道のりをものとはせず必ず駆けつける昼火事の現場、線路のレールに載せたデコイチの石砕き、馬ソリの後ろに見つかるまでこっそり捕まったスキーの道滑り..... ETC。

どれもこれも、銭湯の思い出と同じように、ゆったりとした時間を持っている。

幼い頃から、裸のつき合いの出来た“銭湯”家族の生活の“リズム”だった“銭湯”通い。

そこから湧いてくる懐かしい情景。

生活が豊かになるにつれて自分勝手になり、プライバシーとかいうやつを大事にし、人を思い遣る心を忘れてしまう、そんな21世紀になって欲しくない。

心の中に、生活の中に“銭湯”の暖かさを、ゆったりとした時間を持てる世であって欲しいと願っているのは、私だけではないと思います。



イラスト 技術第2課長 飛渡 秀穂



追記 留萌の銭湯の盛衰

かつて、留萌の街にどんな銭湯があったのかを調べてみる事にしました。

昭和8年8月8日という、未広がりへの字が3個も並ぶ、おめでたい日に発行された、「留萌港在住者案内地図」という複製図を、「海のふるさと館」で見つけました。

今でいうなら住宅地図になるでしょうか。

縮尺1/4000ほどの1葉の紙に区画された市街地が描かれ、1軒ずつの商店名と、苗字が手書きされています。

その数およそ2千軒もあるでしょうか。

地図の上下左右四辺には、各店の広告も載っております。

旅館、漁業組合、鉄道会社、公共電灯会社、銀行、土木建築請負組合、水難救済会、船具卸商、代書、薬局、留萌商工会頭、新聞店、町立職業紹介所、消防組頭、座主(劇団)、木材販売、回送店、石炭販売、鮪、医者、寺、醸造会社、教会、待合所、見番、鉄工所、酒店、米販売、カフェ、割烹等々。

余談になりますが、阿分から北竜へ抜ける、道道増毛稲田線という道路がありますが、そこに架けられている橋の名前に、当時の割烹の名前が付けられているのをご存知でしょうか。

往時の広告は、「日勝亭」_、「喜楽」_、「恵比寿家」_、「辰己」_、「藤見」の順で掲載されていて、阿分から北竜方面にドライブしていくと、大変面白いことに、橋もこの順番で通過していきます。

当時のお役人の中には、大変粋な方がいたようで、とても人間臭く、懐かしい時代が、つい最近まであったんだと感じます。

話がそれましたが、この地図から銭湯の情報を拾い出してみると、次の5軒がありました。住所は現在の町名で表現しています。

1. 「滝の湯」 港町3丁目
2. 「港湯」 本町2丁目
3. 「松の湯」 本町4丁目
4. 「日の出湯」 宮園町2丁目

5. 「亀の湯」 元町5丁目

この内、現在まで残っているのは3軒です。

「港湯」は「泉湯」に改名。

「松の湯」は「旭湯」と改名して、家族風呂スタイルで営業しています。

「日の出湯」は移転して、錦町2丁目で営業しています。

他の2軒は何時の頃か廃業して、今では建物もなくなっています。

更にその後営業を始めたと思われ、そして現在も営業している新しい銭湯は2軒です。

6. 「浪華湯」 開運町2丁目

7. 「秀の湯(東湯)」 旭町3丁目

従って、留萌の銭湯は最盛期で7軒あったと考えられます。

往時、銭湯は夕方から混み始めていたことを思い出しながら、風呂通いは1週間に1回程度だったのではないかと考えます。

男女合わせて1日最大500人くらいは利用していたのでしょうか。

7軒で計算すると、3千5百人になります。

銭湯を使用していた人が、3万人とすると、8~9日に1回は利用していたことになりません。

昔はこんなに銭湯通いしていたのに、各家に風呂ができた現在では、銭湯の経営は困難になってきているのは容易に想像がつかます。古いものが消えていく今の時代で、様式や内容を少し変えながらも、工夫して何とか残ってもらいたいものだと考えるのは、私だけではないと思います。

資料が少ない中から書きましたので、7軒という数も間違っているかもしれません。創業、廃業、料金、客数等、何か情報がありましたら教えてください。

留萌の銭湯の、小史として纏めてみるのも、面白いのではないかと考えております。